2024年全国高校放送コンテスト・愛知県大会

ドキュメント部門　全体講評

0622 NHK名古屋・三ッ橋

皆さん、ドキュメンタリー部門へのエントリー、そして番組づくり、大変ありがとうございました。どの作品もみずみずしい感性で、ハッとさせられるポイントがたくさんありました。

ところで、テレビ、ラジオに限らず、“伝える”ということは何なのでしょうか。私たちがハッとさせられるのは、その話があなたの独自の視点で切り取ったものであるときです。これだけ情報が流通する時代、みんな結構、知っています。でもそこに▼一般的に言われていることとは違う、▼裏にもっと深い理由がある、▼直接、聞いた話である…というあなたしか知らない情報や考え方が加わったとき、ユニークで“知りたい”ものになるのだと思います。あなたが熱心に何かを伝えようとしているとき、おそらくこのような意識で話しているのではないでしょうか。

さて、ドキュメンタリーでもそれは同じです。あなた独自の取材や感じたことが視聴者・リスナーの心を動かします。今回のコンテストでは、「前提」に時間を割いて、「独自」が物足りないと感じる作品がいくつかありました。それは単に時間配分を誤ったのか、「独自」がフワッとしていたので「前提」を長くせざるをえなかったのか。もし、後者なら「独自」を見つけるところから始めましょう。難しく考える必要はありません。本、音楽、テレビ、スポーツ、先生以外の大人、他学校の生徒…。ちょっとだけ外に広がれば（もちろん、自分自身と向き合って内を広げることでも）、ほかの誰も経験したことがない“あなた”になります。いいドキュメンタリーをつくるには、「独自」なあなたになることなのかもしれません。

そして、ドキュメンタリーはチームでできあがります。みんなの「独自」を持ち寄ってチームで大いに議論してください。とてつもない化学反応が起きるはずです。似て非なる「独善」に陥らないようにしましょう。

番組づくりは苦しい局面の連続です。でも“伝えた”“伝わった”ときのやりがいは格別です。どうかこれからもあなたの仲間と番組づくりにチャレンジしていってください。

【テレビドキュメンタリー】

身近な事象から疑問につなげるテーマや知っているようで掘っていくと新しい発見があるテーマなどバラエティーに富んでいて、興味深かったです。「独自」の視点がある作品がたくさんありました。

もったいないと思ったのは、ナレーションとインタビューがほとんどになっている作品が散見されたことです。テレビはそのときの空気感を閉じ込めます。リアルなやり取りやそのときにしか現れない表情が「独自」の取材から生まれるシーンです。ぜひ、大切にしてください（カンペを読ませたインタビューはすぐにわかりますよ！）。

やや技術論になりますが、テーマや結論を先に提示したほうがいいと思った作品がいくつかありました。小説や映画は最後に“そういうことだったのか！”でいいのですが、テレビは疑問が残りながら進むのが苦手な表現メディアです。ネタバラシとの天秤のなかで適切なポイントを探ってみてください。

あと、気になったのはブラー（ボカシ）加工が多かったことです。放送倫理上、映像加工は例外です。

【ラジオドキュメンタリー】

ラジオドキュメンタリーはふだん接しないので戸惑いがありましたが、視覚に訴えられないぶん、構成力と音声の使い方を工夫している作品がたくさんあって、魅力的な表現方法だと感じました。

顔出しだとなかなか聞けない、きわどいインタビューを聞けるのもラジオならではです。耳に集中するからこそ、音の違いを効果的に表現できている作品もありました。ラジオドキュメンタリーならではの構成的・技術的な強みを感じました。一方で、テレビ（映像）で見たいという作品もありました（ラジオドキュメンタリーがダメということではなく）。つまり、「独自」な取材であればテレビでもラジオでもいけるということだと思います。テレビ向きかラジオ向きかを考える前に、「独自」性を目指しましょう。

耳で聞いて論の展開がわかるように進めていく必要があるぶん、テレビより構成がしっかりしていると感じる作品が多かったです。ぜひ、テレビだけではなくラジオにもチャレンジしてほしいと思います。

以上